

慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resources

Title	科学技術社会学の研究者から
Sub Title	
Author	松本, 三和夫(Matsumoto, Miwao)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1996
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.1 (1996.),p.11- 13
Abstract	
Notes	特集: 社会学はいま、何をなすべきか
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19960000-0011

科学技術社会学の研究者から

松本 三和夫

「社会学はこうすべきだ」、という矜持のもちあわせは、残念ながらない。私は科学技術社会学という特異な仕事を細々と続けてきた、ひとりの研究者である。研究活動をとおしてみずから得た経験を、できるかぎり一般化できるように平明に語るのが、来し方になつたことだと思う。特異な仕事に取り組めば、それなりにみえてくる事柄もあろう。それを、編集部の求めに応じて率直に提供することが、『三田社会学』の門出を祝すことになると信じている。

はじめに、時計を10年ほど前に戻させていただきたい。1985年10月。大阪科学技術センターで行われたとある委員会の席上。当時起こった日航機墜落事故の原因として金属疲労が話題にのぼった。金属疲労説は説得的だが、プレスリリースの場面で一般の人にわかりにくいのでは、という発言が出た。そのときである。「金属疲労というのはちゃんとした学術用語として定着しています。それを使って事故の原因が明確に表現できるなら、そうすべきでしょう」。誰かが、そういった。一瞬、沈黙が支配した。みると、よく日焼けした、元気のよさそうなお爺さんが座っている。泰然たる風情である。いったい誰なんだろう。当時30代はじめの元気にまかせて、委員会終了後質問に行った。そして、それが好適出力理論の提唱者として知られる石谷清幹大阪大学工学部名誉教授であることを知った。論文をとおしてのみ知りえた研究者である。私が食い下がって質問するため、場所を移してください、ステーキをごちそうになってしまった。以来、テクニカルな事柄（とくに図面）の裏づけにあたって助言を頂戴するという関係が現在まで続いている（その助言により、博士論文の骨子部分を裏づける膨大な図面にめぐりあうが、それはここでの主題ではない）。

石谷清幹氏のことにごここでふれたのは、同氏との関係をとおしてテクニカルな事柄以上に私が学んだことを書きたいからである。それは、闊達さである。あるとき、苦心して仕上げたかなり長文の丁重なるお手紙をさしあげた。ときを移さず返信を頂戴し、それにはこう書かれていた。「時候のあいさつなどはどうでもよいですから、要点を書いてください。貴殿の疑問点への解答はつぎのとおりです（以下略）」。「一事が万事、もって回った表現、態度を排し、あくまでも物に即して事実を追究する姿勢が背後にあることに、ほどなく気づいた。ここで闊達さとは、このような姿勢をさす。その姿勢は、徹底的に調べあげた事柄に立脚して、内容に立ち入って異論を唱える自由をとまなう。むろん、事実立脚した反論の自由も。それを個人への攻撃と受け取る回路は、はなから希薄である（いわずもがなの内容に多言を弄する回路は、皆無である）。なんともいえぬ爽快感をおぼえた。

科学技術社会学という仕事をとおして得たこの姿勢に照らして世界を眺める習性が、身についたようだ。その姿勢から眺めると、社会学はどうみえるだろうか。それを、つぎに書きたい。

1990年7月。日本科学技術振興財団の助成により、マドリッドで行われた国際社会学会で報告する機会を得た。彼の地で「科学社会学」の部会がもたれた。少し早めに会場へ赴くと、廊下に中年の紳士が立っている。司会者だという。名前を聞くと、R・ウィトリーと答えた。この名を知る日本の研究者は、少ないのかもしれない。私には、ある事柄のゆえに記憶に残る。彼は、1974年に『科学発展の社会過程』という編著を出版した。私の記憶するかぎり、T・S・クーンが『科学革命の構造』で提出したアイデアを科学社会学の方向へと展開した理論書として、おそらく最初のものであったろう。すくなくとも、当時学界の主流だったマートン派科学社会学とまったく異質の仕事であった。1976年になって、『理論と社会』誌に書評が出た。評者は、その後ファッションの社会学へと転進するD・クレーン女史である。雑誌を開くと、ウィトリー氏は「R・K・マートンならびにその弟子の仕事によって認知されている科学社会学のアメリカ学派のアプローチに反対している」、と書かれている。科学社会学といえば、マートン先生によって創始されて以来、測定できる変数に注意を払う研究が存在する。この本はそれらの変数にまったく言及していない。したがって、この本は重要な問題（例、科学の認知過程の解明）を提起してはいるが、評価困難である。こういう論調であった。残念ながら、いわゆる新クーン派科学社会学のマニフェストたる理論書として同書が提起した問題の意義には立ち入ることがない評であった。この論調にしたがえば、既成の研究と一線を画するどのような新しい試みの芽であれ内容のいかんにかかわらずスキップすることができよう。既成の研究の統合度をみかけ上高める以上の効果をもたないからである（既成の研究の基準から評価困難ということであれば、専門を同じくする隣接分野の研究者に評価を委ねればすむであろう）。さきに述べた関連さからはいささか遠い作法であった。

念のため、私はウィトリー氏の信奉者ではない。それどころか、当初よりウィトリー氏の本にはきわめて批判的である。要は、実質的な内容に立ち入って異論を唱える作法に乏しい（それゆえ実質的な反論の自由も欠く）、どちらかといえばカルト集団とみるほうが理解しやすいとも思える状態が姿をあらわした点にある。むろん、これは私の専門分野のなかで経験しえた外国のジャーナルの一時点の例にとどまる。にもかかわらずあえて言及したのは、前記の状態下では、当然ながら学祖のいわば縮小再生産以外の成果を、つまり研究の前進を期待しようがないからである（事実、重要だが評価困難と当初評された科学の認知過程は、むしろ他分野の認知科学や人工知能分野などとの共同研究によって解明がはじまり、新たにBACON、KEKADAなどのプログラムをその後生んでいる）。学術ジャーナルの創刊という新事業に寄せる期待が、それほど大きいからでもある。

数年前、ウィトリー氏と東京で再会した。ちょうど来日中のウィトリー氏を中山茂神奈

川大学教授の科研費グループがお招きして会食の夕べをもった。ウィトリー氏は日本料理を希望し、ちゃんこ鍋などという見慣れない料理と取り組む仕儀となった。ビールもだいぶすすんだ頃、どうしてマートン流ではない研究に取り組もうという気になったのか、思いきって聞いてみた。少しく沈黙。そして、思いがけずこんなことをいった。他人の仕事をなぞってどうするのかね。現代科学の多様性を考えればマートン流でない科学社会学があつて当然と思わないかね。これからは私より若い人たちがその方向をさらに展開してゆくだろう。いまは組織論に取り組んでいて、所属機関で行う仕事とのずれを心配しなければならぬ立場でもなくなった（ウィトリー氏はマンチェスター大学ビジネススクール所属）。もう科学社会学の研究からは退いて、自由に自分のテーマを探すつもりだな。ウィトリー氏と今度いつ再会でき、さらにどのような解答を引き出せるか、それはわからない。たしかなことは、内容に立ち入って異論を唱える自由と反論の自由を実質的に確保する闊達さ、すなわち真に統合度が高い研究に不可欠の条件を失うことが、私たちの予想以上に容易な事柄に属する、という点ではないかと感じる。願わくば、後世の史家により『三田社会学』がそのような闊達さを体現する場として独自の研究成果を生んだ、と評されんことを。

末尾ながら。歴史ある三田キャンパスのなかから新たなメディア創出がはじまったことをすばらしいと思う。ところで、研究の場としてのメディアは、元来大学という組織の境界をこえてしまうように私には思えるのだが、いかがであろうか。

(まつもと みわお 東京大学大学院人文社会系研究科)